

## カティンの森事件とモンゴル・シベリア抑留 5/26

第111回例会は、『命の嘆願書』の著者・井手裕彦氏と「シベリア抑留体験を語る会札幌」の建部奈津子氏のお二人にご講演いただきました。参加者は30人、うち会員は11人でした。

今回お二人をお迎えしたのは、昨年11月に第109回例会として開催した『カティンの森のヤナナ〜独ソ戦の間に消えた女性飛行士』の著者・小林文乃氏の講演会に今回のお二人が参加され、積極的に発言してテーマの掘り下げにご協力いただいたことがきっかけでした。

お二人の活動内容についてはPOLE前号と今号で詳しく紹介されていますが、お二人の熱のこもったお話に参加者は引き込まれるように耳を傾けていました。とりわけビデオ映像による3人の抑留体験者の証言は多くの方の心に残るものでした。

(園部真幸、副事務局長)



写真撮影 尾形芳秀



## 死亡記録を遺族に届けたい 井手 裕彦

「ポーランド国民が犠牲

になったカティンの森事件と

日本人に降りかかったシベ

リア抑留とは、同根の強制連行被害なのです」

私が講演のまとめとして語った言葉です。

アンジェイ・ワイダ監督の映画『カティンの森』には、主人公のポーランド軍大尉がソ連軍に捕虜として連行されてから虐殺されるまでを記した日記が妻の元に届けられるシーンが出てきます。

ソ連占領下、遺品は真実を知る証拠物件になるのを恐れ、返還されていませんでした。でも生き残った部下の計らいで送られてきたのです。映画では返還後は表されていませんが、妻が夫の日記を生きる支えとしたことは間違いないでしょう。

講演後の参加者との交流会の最後、司会の方から「今後の取り組みは？」と聞かれました。即座に私の命が続く限り、やめるわけにはいかない、ある取り組みのことを答えました。

私は、遺品ではありませんが、2020年1月、訪れたモンゴル国立中央公文書館で日本人の軍医や大隊長らが最期を看取った抑留者計350人の死亡記録を入手してきました。

遺族が一番知りたい死亡の経緯や最期の様子を記した記録が少なくありません。しかし、私の情

報提供で同じ記録を入手してきた厚生労働省が遺族に届けるのは、新規に身元を特定する死亡者の45人だけです。つまり、残りの305人の記録は、私が動かなければ、厚労省の倉庫の中に眠ったままになるということです。

昨年8月刊行した拙著『命の嘆願書〜モンゴル・シベリア抑留日本人の知られざる物語を追って』(集広舎)に死亡者の氏名と私の連絡先を掲載。記録に書かれたわずかな情報からこれまでに4人の遺族を捜し出し、記録を届けました。それによって父親の死因が80年近くたってわかった遺族もありました。

個人情報への壁があっても遺族捜しは超がつく難作業です。留守宅が北海道だった死亡者も14人います。紙面を借りて以下に名前を挙げます。心当たりがあれば、私の携帯電話090-2705-9901にご連絡ください。(敬称略、括弧内は出身地の旧住所)

佐々木金男(名寄町)、立崎政信(室蘭市)、仁木島儀一(札幌市)、三浦孫三郎(栗山町)、山崎正治(長万部町)、斉藤三蔵(樽岸村)、南澤源吾(芦別町)、高崎慶吉(函館市)、井出希福(音更村)、三浦岩太郎(札幌市)、福地兼吉(愛別町)、中原金一郎(釧路市)、越中善太郎(美唄町)、坂本末吉(釧路市)

(いで・ひろひこ、元読売新聞

大阪本社論説委員・編集委員、本会会員)

## 抑留の体験を後世へ継承していくために 建部 奈津子

ご来聴の皆さまへ心よりお礼申し上げます。

当会の活動は今まで体験者による講演がメインでした。しかしコロナ禍に他界された語り部も数名おられ、体験者の証言をご本人から自分の耳で聴けることは残り少なくなりました。今回私がお話させ

て頂き、最初は皆さんの表情が硬く、鋭い眼差しで少し緊張しましたが、真剣に耳を傾けて下さり、「盗られないように軍服の脇に縫い付けていた親戚の叔父さんからもらった形見の腕時計と交換して枕にしていた黒パンが、夜中トイレへ行って帰ってきたら、

頭がゴツンと行くんだもの～あれっ!! あれっパンがねえ! 誰が見ているんだか～」と言った瞬間、真っ白な歯を見せて笑顔が見えて一安心しました。

補足ですが、吉田さんは4年ぶりの帰国でした。帰国船から薄っすらと薄墨色の日本の山が見えた時は、船が傾くのではないかと思ったほど、一斉に皆が日本の景色が見える方に駆け寄りました。皆数年ぶりに見る日本の景色に感動したのです。5年以内に帰国できた抑留者は9割と言われます。残りの方は最長18年余、長期間抑留されました。

いつ帰国できるか全くわからない絶望的な不安がぬぐえない生活を強いられていました。帰国交渉は当時アメリカとソ連でされていました。一時帰国が中断された時期もあります。日本で待っている家族はどんな思いだったのでしょうか。

今後皆さまもシベリア抑留に関する映画や外国の戦争映画をご覧になられた際、捕虜という表現や敗戦国という意味をどうとらえるか意識されてみ

ては如何でしょうか。インタビュー動画の中で捕虜という言葉を使うのが嫌だという語り部が多いことも頷けます。



このようにシベリア抑留を風化させないで後世へ継承していくためには、絵に遺す、インタビュー動画や本や映画で伝えることが、多くの方の目に触れるために必須になってくると思います。日本の過去についても意識し、同じことを繰り返さないよう教訓を生かせるでしょうか。

今の平和があるのは、戦争で苦しい想いをされ命からがら生き残って帰国された方々が、戦後の苦しい時期に復興に力を注がれ今日があることを決して忘れてはなりません。一枚の召集令状から命の重みを改めて考える機会になることを切に願います。

(たてべ・なつこ、シベリア抑留体験を語る会札幌 会長、本会会員)

◆アンケートの感想より (アンケート10枚、質問用紙1枚)

<p>井手氏:カチンの森=ポーランドにしぼり上手に話された。時々の質問も、参加型の意識を持たせよかった。</p> <p>建部さん:三人の体験者のビデオは説得力がちがう。生の声、叫び、願いであった。ご本人は、こういう出演でも充分伝わった。ご高齢なので、DVD 出演でよかったと思う。昨年11月の関連から今日2名の方々が実現した。こういう鎖状的にかまわない。この両名の講演、たいへん評価いたします。(70代)</p>	<p>(もともと、今回参加したのは、次のアイヌ文化に関する講演がきっかけで)どうせなら、と思って参加させていただいたようなものでしたが、想像以上に学びになるお話でした。モンゴルについて、「馬の年によって名前が変わる」ぐらいしかイメージがなかったけれど、モンゴルであった出来事を知って、たいへん衝撃を受けました。歴史を暗記科目にしてはいけないという点に賛成です!(10代)</p>
<p>井手氏の講演による大変わかりやすい丁寧な語りでビデオ(DVD)を併用し理解が少し深められ良かった。(80代)</p>	<p>これまで知らなかった事実がわかり、非常に勉強になりました。</p>
<p>ウクライナで起きている現状をみると、同じ結果を残すのではないか。ロシアは何も変わっていない。1920年生の人は抑留3年で帰国。志願してから(18~28)10年。(70代)</p>	<p>建部さんの話がわかりやすかったです。負の遺産これからの若い人に残すべき。吉田さんの話は多くの人に聞いてほしい。DVD 見て泣きました。(60代)</p>
<p>井手氏の講演:カチンの森事件については把握していましたが、同事件について認識してその後勇気を持って声を上げた日本人がいたことは知りませんでしたので、大変興味深く聴くことが出来ました。また、自分たちはどうすべきかは、とても重い課題として心に残りました。私の質問に大変分かりやすいお答えありがとうございました。(60代)</p>	<p>本日の演題にある小林多美男氏の話、大変興味深く、また改めて自分だったらどうするかという質問に本当に迷いながら答えました。井手さんは、仮にこのような状況になった時は、小林氏のような生き方をしますか? また、小林氏のような生き方を他者にすすめますか?</p>
<p>井手氏の「もし、あなたがその立場に置かれたら」の問いかけと用意された3つの選択肢には何の意味もない。死が目の前にぶら下がっているような極限状態に置かれた時に、自分がどうするかなど、その時になってみないと分からないに決まっているからだ。井手氏自身は(3)を選択するとし、カンボジアでの体験を語ったが、その言葉にはまったく説得力がなく、ただの願望にしか聞こえなかった。実際の抑留体験者は、「あなたがその立場に置かれたらどう</p>	<p>する」などという問いかけは決してしないだろう。</p> <p>建部氏がビデオで紹介している語り部の方々が私たちに求めているのは、あえて苦しい記憶を掘り起こしひたすら体験を語り伝えることで、戦争の現実と正しく向き合ってもらうことである。その言葉には何百分の本以上の説得力があった。そして、そのことを持続的な取り組みとして後世へ伝えようとする建部氏らの活動には頭が下がる思いがする。(70代)</p>